

(様式第1号)

■ 会議録 □ 会議要旨

会議の名称	令和5年度 第1回芦屋市市民参画協働推進会議
日時	令和6年3月21日(木) 午前10時～午前11時45分
場所	芦屋市役所東館3階中会議室
出席者	会長 浅見 雅之 副会長 井関 崇博 委員 出口 睦子 宮平 太 高橋 洋一
欠席	委員 松井 順子 眞伏 しらべ
事務局	市民参画・協働推進課 課長 小川 智瑞子、係長 大西 貴和、井上 真希
会議の公開	<p>■ 公開</p> <p>-----</p> <p>□ 非公開 □ 一部公開</p> <p>[芦屋市情報公開条例第19条の規定により非公開・一部公開は出席者の3分の2以上の賛成が必要]</p> <p><非公開・一部公開とした場合の理由></p>
傍聴者数	0人

1. 会議次第

- (1) 開会及び委嘱
- (2) 会長・副会長の選出
- (3) 議題
 - 【議題1】 令和4年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果について
 - 【議題2】 芦屋市市民参画協働推進計画の策定について
 - 【議題3】 あしや市民活動センター指定管理事業「市民のつどい場」について
- (4) その他
- (5) 閉会

2. 提出資料

- (1) 次第
- (2) 委員名簿
- (3) [調査票1] 第3次芦屋市市民参画協働推進計画 R4年度取組(資料1)
- (4) [調査票2] 公共施設等の提供について(資料2)
- (5) 「市民参画協働推進計画」の「第5次総合計画(後期)」への統合について(資料3)
- (6) 計画統合の時系列イメージ図(資料4)
- (7) 市民参画協働推進計画策定に係る諮問書
- (8) つどい場資料(資料5)

3. 審議内容

(1) 議題

【議題1】令和4年度第3次芦屋市市民参画協働推進計画の事業実施結果について

(浅見会長) おびたしい数の事業案件は、「芦屋市総合計画」を市民協働のテーマ目線で横串を刺したところ、これぐらい出てきたということでしょう。

市民参画協働推進会議としては毎年の取組の進捗について報告を受ける立場にあり、市が進める市民参画・協働の取組がより良く進むため、委員の皆さまからのご助言や、提案などが求められています。

委員の皆さまは、行政とは異なる立場でそれぞれ、まちづくりに関わっていらっしゃるかと思いますが、そこで得た知識やご経験などから「参画・協働の取組を進める上でのアドバイスや体験談」「こんな取組なら市と一緒にできる」などご意見いただけますでしょうか。

(高橋委員) 「C 目的を達成できずもしくは未実施」がかなりあるようですが。

(事務局:大西係長) 何もしなかったというよりは、できなかったということです。

(高橋委員) コロナかな？

(事務局:大西係長) 「No.11 あしや保健福祉フェア」はコロナのため開催できませんでした。そのためCにしています。

「No.29 官学連携事業(市民マナー条例関係)」「No.60 地域とのパートナーシップ研修」もコロナの影響が大きかったようです。

(浅見会長) コロナの影響なら仕方がない。それ以外の要因でつまづいてるところはありますか？

(事務局:大西係長) 取組自体がつまづいているというより、毎回同じような取組になってしまっているところはあるかもしれません。新たな対策ができていない。そういったところをどう広げるべきか、所管課も悩んでいるように感じます。

(浅見会長) 同じことをやること自体は悪いことではない。いいことであれば同じことを続けたらいい。ただ、広げるべきという話については、おっしゃるとおりです。例えば「参加者が固定されている」「もっと広く市民に知らせたいのに届いていない」ということはあるかもしれない。

市民参画・協働に関する取組や市民参画・協働社会を実現していく上で、芦屋市が足りていないことや「もう少しこういうマインドでやった方がいいんじゃない？」というような発言の方がしやすかったら、そのような意見でも構い

ません。個別の事業に対する「これがいい」「これが悪い」は、もう自己評価できているので、これはいいと思います。

そもそも、このたくさんの事業は、何を目指しているのか。「市民参画・協働の社会が根付くことを目指していこう」と考えた時に「本当にそういう社会が目指せるのか」「目指していくために担当課としてはどんなことを考えていたらいいのか」「芦屋市全体でどんなことを考えていたらいいのか」。このような議論の方が建設的かもしれないですね。そんな視点でどうでしょう？

(井関副会長) 私も浅見会長の意見に賛成です。

この「資料1」は、市民参画・協働推進課が年に1回、各担当課の取組を大きな4つの枠組みで整理して確認したということですよ。情報発信」「場づくり」「人づくり」「市民参画・協働促進に向けたマネジメント」の観点で、全体的に確認できる状態になっている。「資料1」全体を見たときに、どこが足りなくて、どこをもっとやった方がいいのか、確認できる状況です。それについて、我々がサポートできないことがないかということ。

むしろ、市民参画・協働推進課の方が「資料1」を見て、どう思ったか聞きたい。

その思いを聞くことで、アドバイスや違う観点から意見することができると思います。ざっくばらんな会議です。お聞かせください。

(事務局：大西係長) 令和4年度中はコロナの影響が大きかったので、各所管課も「〔施策テーマ1〕情報発信」について、かなり努力したと思います。ハッシュタグ、YouTube、Slidoなど、新たな媒体やツールを開拓した印象はあります。

ただ、そこに特化している課に限られているようです。今回でいうと広報国際交流課、政策推進課です。うまく使えていない課もあったようで、庁内にフィードバックや連携がうまく取れていない印象でした。ただ、それは令和4年度中のことです。令和5年度には、横つながりで新たな媒体がどんどん広がっていった印象です。

コロナが落ち着き始め、リアル開催の会議が復活する中、コロナ渦で使っていたZoomも多用しています。遠方の方とはZoomで事前打ち合わせをするようになりました。わざわざ足を運んでいただく機会をできるだけ減らすということが、ある意味定着したように感じています。コロナ渦を経て情報発信の仕方は、だいぶ前向きな変化があったようです。

ただし、「〔施策テーマ2〕場づくり」と「〔施策テーマ3〕人づくり」については、まだまだ懸案事項や課題が残っている気がしています。

「場づくり」については、公共施設だと限られている部分がありますが、民間施設の開拓は進めています。例えば介護関係。民間でも地域での見守りの場のような場所がどんどん増えています。ただ、そこはコロナで少し引っかかっている所以、これから声かけをし、広げていく手立ては恐らくできてきているのではないのでしょうか。

「場づくり」となると、やはり「家から近いところがいい」という意見が多くなると思います。芦屋市ですと、山手は公共施設が少ないということもあり、そこについては課題と感じています。ただ、これ以上公共施設を作っていくことは財政面的にも厳しいところもあり、うまく進んでいないのは確かです。

「人づくり」については、これが一番難しいと思っています。「人と人をつなぐ」という意味もあると思います。業界の専門家を呼び、講演会を開くこともしています。ただ、やはり「その伝手」を誰がお持ちなのか。繋げていくということは難しい課題と感じています。お呼びしたら金額もかかってきますし、そこをどのように改善、取り組んでいけるかは課題になっていると思います。

(事務局：小川課長) 「場づくり」について補足します。この後の「議題3」にもある市民活動センターでの取組です。令和5年度から新たな試みで、誰でも気軽に集える場というのを継続的にやっている事業があります。それについても、この後、報告させていただきます、委員の皆様のご意見をいただけたらと思っています。

(浅見会長) 話がテーマ的には広がって、市民参画・協働推進そのものを、どう見るかみたいな話になっている。個別事業の話を追いかけても仕方がない。これに関して、特に疑問や「私は納得いってない」ということがなければ、個別事業の話は状況が分かりました。

(宮平委員) 少しよろしいですか。個々を深めていくという話でした。補助金の部分、期間限定で補助している事業もあると思います。継続性や後追いを、どこまで足りているのかということも今後の部分だと思います。

事業評価を見ている中でも、初めての活動をするための補助金や「通いの場」という事業、恐らくこれは2年限定だったと思う。その後、その活動が継続しているのかということも気になります。

我々は、「通いの場」の事業をされている団体と関わります。「通いの場が終わったら、資金がなくて…」と相談を受けたりもします。そのあたり、事業効果というところの部分とも関わってくると思う。担当課の考えがあるなら、お聞きしたい。今後、評価の1つに、その考えを入れていただきたいです。

(浅見会長) 市民自らの力で地域に役立つことを始めて、スタートアップに補助金が出ることはいい話。ただ、事業継続のために補助金を出し続けると、これはおびただしい数になる。スタート時点でフォローし、自立的に動いていくようなモデルを作るべきです。

補助金を貰っていたから実現できていたけど、補助金が貰えなくなったらできない。それは、続けるためのモデルがないからではないか。「もらい続けなきゃ、続けられへん！」では続かないし、原理的に不可能。どうやったらいいかな。例えば、市や社会福祉協議会として「こうしたら続けていけるよ」というモデルを見せてあげるのはどうでしょう。補助金を出しっぱなしは良くない。

「後は知らない」だと、本当に知らないことになってしまう。そして活動がなくなっちゃう。

(宮平委員) 「通いの場」の事業になると、ある程度収入がある団体は、対象外のようなところに引っかかってくる。期間限定にする場合、最初からある程度収入があることも前提にしてもいいと思います。仕組み、そのものについても考えていただければありがたいです。

(浅見会長) このような補助金は、市民に力をつけてもらい、自立的に活動できるように育っていくことが目的だから、お金を投入し続けることだけが正しいわけではない。

(宮平委員) どういう支援がいいのか。お金以外の支援とは何か。我々、社会福祉協議会も課題です。

(出口委員) 市民参画・協働推進課で「市民提案型事業補助金」という補助金があります。採択された方は事業に向かって活動される。ただ、中には不採択の方もいる。リードあしやでは不採択の方たちの受け皿もあり、支援の場を提供しています。リードあしやと協働事業をする仕組みで「Just Do It」という取組事業です。「補助金は不採択だった。でも、やってみたい!」「採択事業が終了し、補助金も終了した。でも、この事業を継続したい!」「でも、その仕組みがわからない…」そんな場合は、運営方法の相談、リードあしやと協働事業で場所の提供をしています。

申請前の相談、採択後の支援ももちろんしています。もちろん継続できない方もいますが、できるだけ継続できるよう、私たちも支援しています。一例となればいかと思っています。

他の補助金で、補助金期間が終了した方たちは今どうされているのか、私も聞きたいです。

(浅見会長) そのようなモデルケースあるといいですね。「このようにやっている団体がありますよ」と紹介できる。団体同士が横つながりで支援し合ってくれたら、それこそ本当に市民協働社会じゃないかな。ネットワークづくりやネットワークに対して活動支援をすることが本当はいいと思う。

「芦屋市のために何かしたい」と思いついて市役所に相談したときに、市役所としても頼れる案内先、リードあしやのようなところがあるといい。「そういう活動だったら、ここに相談に行ってみたらどうでしょうか」「この活動をしている人たちに会いに行ってみたらどうでしょう」のような案内ができるといいと思います。大事な話ですよ。伴走支援というより協働事業としてやっているんですよ?

(出口委員) はい、そうです。

(浅見会長) 一緒にやろうよという感じですね。不採択になった人たちが「それでもやる！」という気持ちは、すごく大事。補助金を出さなくなっても、できる活動を継続してもらおうことが、補助金を出す目的でしょうね。

(出口委員) 不採択団体は、不採択理由を聞いているはず。それをリードあしやで「その理由で不採択だったら、こう変えて、こうやっていけばできるんじゃない？」というアドバイスや運営支援をします。部屋を無料にすることはできないけど、広報の部分でのお手伝いするとか。

補助金が採択されても、補助金期間終了後に継続できるかということは重要です。ただ、継続するためにはあまり無理をしてもいけない。そういうことを考えていく場があってもいいと思っています。

(事務局：小川課長) 市民提案型事業補助金も当初は市が主導でやっていましたが、去年から申請段階からリードあしやにお願いしています。手続き段階からリードあしやとの接点をつくっていただく。採択された方はもちろん、出口委員がおっしゃったように、不採択の方に対しても続けるための支援ができます。協働してやる方向性になり良かったと思っています。

(井関副会長) 今の話は、施策体系のテーマ4つにすべてに繋がっていますよね。先ほどの説明だと「場づくり」というより「空間としての場」の話が多かったように思います。それはそれで大事。ただ、出会いの場のような、テーマについて話し合う場も必要。「こういう問題があるんだな」「これを、やらなくてはいけない」「自分ができるかな」と思える場が大事。「人づくり」の話も入ってきます。

補助金不採択後に支援するノウハウはまさに「人づくり」だと思う。協働や補助金採択など、事業をレベルアップさせるために、調査や研究とかもやっていくという意味でもそうです。「市民活動の発展とはこういうものなんだ」というモデルを情報発信としていくと、自己発展になると思う。

施策の整理として、この4つで切るのはいいですが、もう少し連続しているものとして見せていくことも大事だと思います。マーケティングでいう顧客目線のように、市民活動の実践者目線で「この段階で実践者は何が欲しいのか」「次のステップで何が必要なのか」「次のステップに行った時にどのようなものが必要なのか」という整理をする。段階ごとのサポートが整理されるといいと思います。実質的に今はNPOセンターでやっているということですが、もう少しそれを全体として発信していくと、それがモデルになっていくと思います。

(浅見会長) その発信は、具体的にはどんなかたちがいいのでしょうか。「こんなことをしている人がいますよ。素敵ですね。」というようなことを出していったらいいのでしょうか。

(井関副会長) 確か何か事業をされてはいましたよね？

(大西係長) プラットフォームです。

(井関副会長) プラットフォームの事例は絶対に大事。ただ事例だけだと特殊化になってしまう。もう少し包括的なものが必要。どのようにステップアップしていくかというガイドがあった方がいいと思う。テキスト的なもので、事例がセットになっているような。本屋に行けば関係する本もあるけど、芦屋バージョンのもので、芦屋の事例で説明していただくと、より自分ごととして受け止めてもらえると思います。

【議題2】芦屋市市民参画協働推進計画の策定について

(事務局：小川課長) 現在、市民参画協働推進計画を推進していますが、第3次計画が令和6年度をもって終了となります。

本来であれば、第4次計画をまた新たに策定していくこととなります。次の計画（令和7年度）から2年前に市民アンケートを取り、令和6年度末に策定するという流れになります。

「資料3」をご覧ください。「第3次芦屋市市民参画協働推進計画」は、分野別計画として総合計画の各施策に市民参画・協働の観点から横串を通し、市民と行政による住みよいまちづくりを推進することを目的としています。

◆資料3の2に基づき説明

市民参画協働推進計画とは別に、政策推進課所管の「文化推進基本計画」というものもございます。こちらも「芦屋市総合計画」に統合したいと考えております。「総合計画」「市民参画協働推進計画」「文化推進基本計画」この3つの計画を統合し、策定しますが、それぞれの計画の評価は、統合後も継続する必要があります。それぞれの評価については、それぞれの推進会議で評価を続けていくということです

お手元に「諮問書」も用意しています。

現在は「総合計画」「市民参画協働推進計画」それぞれで冊子を作っていますが、市民アンケートや意見調査など「総合計画」と被る部分もあります。個別で実施すると、それぞれに費用が発生します。

国は、計画がたくさんある中で、統廃合も含め、策定手法等について自治体の意思を尊重すると示されていますので、本市におきましても検討してきました。

「芦屋市総合計画」の中でも「市民参画協働推進」は重要な視点です。そういった意味で今回一体的に策定をします。

それに伴い、現在の「第3次市民参画協働推進計画」を1年延長し、令和6年度から策定していく「総合計画」と一緒に盛り込んでいきたいと考えています。

浅見会長には総合計画審議会にも出ていただくことになり、市民参画の視点で発言していただく機会もありますので、我々にとっても前向きな方向性で進んでいけると思っています。

(浅見会長) 次期計画策定について、市の「芦屋市総合計画」と一体で計画を策定するという、そのため、今の計画期間を1年延長するという説明が事務局からありましたが、ご質問やご意見などはございますか。

簡単に言うと、市民参画協働推進計画を2年後に「総合計画」に合体させるが、問題ないですね？「総合計画」に合体させると「市民参画協働推進計画」策定期間が1年足りなくなる。そこで、3次計画を1年延長し、「総合計画」ができるまでの間を埋めますということです。

これについて、皆さんから特にご意見があれば、質問でも構いません。

「総合計画」に市民参画・協働のテーマで横串を通したら「市民参画協働推進計画」ができあがるということです。

「総合計画」の中で「横串を通して取り出すようになります」「市民参画的にはこの話です」ということが、きちんと見えるような編集の仕方が必要です。策定の仕方というよりはね。

私は、計画統合は合理的と思いますが、皆さんからは何かありますか。

(高橋委員) 「第5次総合計画」に入って、独立して「第3次文化推進基本計画」「第4次市民参画協働推進計画」は残る？

(事務局:小川課長) 「総合計画」後期の策定で一体的に扱うということです。

(浅見会長) 「第5次総合計画」の中に「第3次文化推進基本計画」と「第4次市民参画協働推進計画」が入っているのは分かりにくい。どこかに「2次3次と続けてきたけど、これは4次に当たります」と小さく書いたりして、編集の仕方だと思います。

(事務局:大西係長) 1つの章として計画に落とし込むというよりは、市民参画の考えの理念が全体に散らばっているような落とし込み方になるかもしれない。考え方はこれから進めていくことになると思います。

(浅見会長) 「総合計画」も、漠然と個々の事業を書いたりすることは基本的にはないでしょう。横串が見えるように策定していただきたい。それが合理的だと思います。

(井関副会長) これは難しい話だと思います。今の議論では、「第4次市民参画協働推進計画」は「個別にもう作らない」という理解で間違いはないですか？

(事務局:大西係長) おっしゃるとおりです。

(井関副会長) 「総合計画」の中に記載内容が入るということですか？

(事務局:大西係長) 計画の中に、位置づけられるということです。

(井関副会長) 「第5章 第4次市民参画協働推進計画」と、章立てにはしない？

(事務局:大西係長) まだ検討中です。「文化推進基本計画」は章立てになるようです。「市民参画協働推進計画」は個別事業に対しての評価はあまり意味がないので、章立ては不向きかもしれないです。全体的に「市民参画・協働の理念を意識しながら取り組んでください」というような落とし込みになると思います。

(井関副会長) 現行の「総合計画」と似たような理念は書かれていたりしないのですか？「市民参加でいろいろやってみましょう」という理念的なことは、現在の「総合計画」でも恐らく書いていますよね？

(事務局:小川課長) はい。書いています。

(井関副会長) では、この統合は、もう少し踏み込んだ統合ということですね？

(事務局:小川課長) はい、そうです。市民参画の手法などを、より詳しく盛り込んでいるということです。見せ方については検討課題ではありますが、そこを補えたらと思います。

(井関副会長) 市の事業の中に、縦的なものと横的なものがあって、横的なものが「総合計画」に統合するのはいいと思います。

ただ、計画というのは、通常このような会議で、専門知識がある委員同士が議論して策定しますよね。「総合計画」に統合したときに、浅見会長が「市民参画協働推進会議」を代表して1人で「総合計画」の会議に参加だと、今までとは違いが出てくるような気がする。

(事務局:小川課長) 「市民参画協働推進計画」の部分は引き続き、この会議で協議をします。

(井関副会長) 「市民参画協働推進計画」の中身の議論は所管でやって、「総合計画」に上がったときに、浅見会長がきちんとチェックするという感じですか？

(事務局：小川課長) はい、そうです。中身については、この市民参画協働推進会議で引き続き議論していただく予定です。

(浅見会長) 「市民参画協働推進会議」というテーブルで、市民参画目線で「第5次総合計画」の内容をチェックすることが発生するという理解でいいですか？

(事務局：小川課長) はい、そのとおりです。

(事務局：大西係長) 例年ですと、市民参画協働推進会議は年1、2回程の開催ですが、令和6年度4月以降は進捗によって、今まで以上の開催になるかもしれません。

(事務局：小川課長) 令和6年度から2年間で策定するので。

(浅見会長) 「市民参画協働推進計画」は章立てしない方向。ただし、「第5次総合計画」全体的に市民参画協働推進の理念が取り込まれているか、「第5次総合計画」全体的に物を言わせていただいてもいいということですね。

「第5次総合計画」前期に関わった経験ですと、前期は市民の方とワークショップをして、かなり話し合ったので、そういうやり方をするのかなと期待をしています。そこで「市民参画とは何か」という議論がきちんとできるといいですね。もちろん「市民参画協働推進会議」の場でもしっかりと議論はしたいです。

「総合計画に統合していいですか？」「そのために計画を1年延長します」という質問に対して、「市民参画協働推進会議」の委員としては「OK」と回答します。ただ、「市民参画協働推進会議」の意見が、きちんと反映されるような仕組みにしてください。皆さんよろしいでしょうか？

-----<異議なし>-----

(浅見会長) ありがとうございます。

続きまして、「【議題3】あしや市民活動センター指定管理事業「市民のつどい場」」について、事務局から説明をお願いします。

(事務局：大西係長) ◆つどい場資料(資料5)に基づき事務局より説明

(事務局：大西係長) 芦屋市内の市民活動の取組事例を紹介します。事例に対して、ご提案などいただけたらと思い、議題にしています。

「市民のつどい場」という令和5年度からの取組です。毎月第4日曜日の午前中、年間12回、リードあしやでの開催です。令和5年4月～令和6年2月まで

開催分は終了し、だいぶかたちになってきているように感じます。参加者は現時点で、延べ161人です。

1 ページ目の画像は初回 1 回目開催時の写真です。

夏ごろに「せっかくだからもっと大きな企画をしよう」という話になり、12月24日に「ソーシャルグッドなつどい場」を開催し、40人集まりました。

芦屋市に住んでいる人、働いている人、学んでいる人、活動している人。芦屋市に関わっている人に集まっていただきました。自分のこと、日常のことなどを語っていただき、誰かとつながるために話を聞きながらワイワイと話をする場です。

テーマを設定せずに約1年開催してきました。ある回では「今日はいい天気だよ」「今のみんなの気持ちは何色ですか?」という話から「今日は天気がいい。青空。だから気持ちは青色です。」とか言って、他の人も「私はピンク」「私は赤」というのをどんどん言っていく。みんな今の思いのたけを話していきます。ホワイトボードに会話の記録を書いて、グラフィックレコーディングという手法です。グラフィックレコーディング担当が作って進めています。

前半は何もないテーマ。その時に思いついたテーマから「それ面白いね」となり、波及して後半のテーマに繋がっていったりもします。

2枚目には、12月開催した「ソーシャルグッドなつどいの場」についても記載しています。この時だけはテーマ別にしました。「福祉・バリアフリー」「教育・子育て」「健康・シニアライフ」「小商い・ビジネス」「国際・環境」を最初にテーマ設定して「テーマ別に参加したい人」を1ヶ月前にチラシ募集して、当日は40人集まりました。午前中はテーマごとに集まって話しをする。昼ご飯はみんなで、おむすびとお味噌汁を食べる。午後からは40人全員で集まって話をする場になりました。フリートークで繋がる場づくりです。

2枚目にはグラフィックレコーディングや参加者の写真も掲載しています。

令和6年4月以降は、別のやり方にしてみてはどうかという提案もありました。令和5年度はリードあしやで開催してきたので、令和6年度はリードあしやの外に出てはどうかという意見もありました。美術博物館やリニューアルオープンした打出教育文化センターで開催してもいい。施設に応じてテーマ設定してもいい。

リードあしやで開催する会、リードあしや以外で開催する会、テーマ設定をする会、テーマ設定をしない会、固定メンバー以外にも参加していただけるように、いろいろ開拓できればいいと思っています。リードあしやで主に進めていただいている事業の紹介は以上です。

(高橋委員) 継続してるんだね。行きたいな。

(事務局:大西係長) 是非、ご参加ください。

(高橋委員) これの英語バージョンもやりたいと国際交流協会です話しています。ワンコインカフェで外国人や英語で喋りたい人が集まって。また広報します。

(浅見会長) 英語バージョンも面白そうですね。出口委員、何か補足があればお願いします。

(出口委員) テーマですが、これは事務局が決めているわけではなく、参加者である市民の方の意見から動いているものです。

もう1つ、面白いとされていることをご紹介します。この「市民のつどい場」では、私は「出口」という名前で参加はしていません。呼ばれたい名前、あだ名で参加します。私は「むっちゃん」と呼んでもらいたいから、その場では「むっちゃん」と呼んでもらっています。名前とは関係のない名前で呼ばれたい方もいます。小川課長のことも、その場限定で「ちこさん」とお呼びしています。とてもざっくばらんに話ができる場。呼ばれたい名前で呼び合うということ、すごく特徴的だと思っています。

(浅見会長) とても上手だと思う。

(出口委員) 最初のテーマの中で「テーマを決めてやるのがいいのか」「決めないほうがいいのか」ということが議論に上がりました。

(浅見会長) いらないよね。基本的には。

(出口委員) そうなんです。最初はテーマがないと参加しにくいと感じる方もいるのかなと思っていました。

(浅見会長) そうか、看板がないとね。

(出口委員) 「子育て」というテーマがあるほうが、子育てに興味がある方が参加しやすくなるのではと思っていました。しかし「テーマをなくしてみて、本当に喋りたい人が喋りたいものを持ち寄る会の方が面白いんじゃない？」というのでやってみると、結構みんな思いのたけを喋ってくれました。定期的に来られる方、単発で来られる方、いろいろな方がいらっしゃいます。その時によってカラーも全然違います。

(浅見会長) 面白いですね。

(出口委員) はい。毎回参加していますが、面白いなと思っています。

(高橋委員) 先日、自治会連合会所属団体の各代表と民生委員・愛護委員・子ども会と集まって会話をする会がありました。最初は何を喋っていいか全くわからない。でも、ファシリテーターの方がうまくしてくれました。4枚カードを出してクジを引く。そして「自分の一番好きなこと」「やりたいこと」などがあって、くじ引きで当たったことを話題にして喋っていく。これが結構、打ち解けるといふか、いろいろな話が出た。素晴らしいなと思いました。そのような場が、参画の起点の1つになるのではないのでしょうか。そのようなところから、まちおこしなどは起こるのかなと思いました。

それから、31日に茶屋之町を歩行者天国にする会議がありました。メンバーは、商店会会長・自治会長・その街に住んでいる方・警備員の方・NPOの方などでした。みんなでディスカッションをしながら作っていくことは、場づくりの1つの契機でもあるし、市民がやっていくことはいいことだと思いました。

(浅見会長) いろいろな地域のお世話をしている「元気で頑張っている地域」「継続的にずっと力を発揮している地域」には、共通の特徴があると思っています。それは「地域の皆さんが何を言っても怒られない、自由に発言できる場所を持っている」ということ。そのような会議ができることが、地域が元気に継続していくポイントだと思います。

それが、芦屋市の中で、実現できている場所がたくさんある。他の地域では、若い人たちが発言した時に長老の人たちが「あなたは若いから何も分かっていない」「3年前は上手くいかなかったから無理」とか、自由に意見が言える場がないということも聞きます。自由に発言できる空気が、希望的に未来をつないでいくと思っています。芦屋市では、そのような場所がまさに実現している。リードあしやだけでやっているのはもったいない。同時多発的に、あちこちで会合が起きていることが、芦屋市的にはいいのではないのでしょうか。そのためには、やはりファシリテートができる人やレコーディングができる人が必要でしょう。みんなが見ている場で記録ができる仕組みを用意しなくてはいけないので、なかなか簡単ではないです。

高橋委員がおっしゃった「ワンコインで、英語でやりましょう！」みたいな話も面白いと思う。「私たち今度はここでこんなことをやるよ」ということが派生的にあると面白い。「テーマを決める」「テーマを決めない」という話でいうと、テーマを決めると、テーマに関係ある人は参加するけど、そのテーマが終わると去っていく傾向がある。本来の目的はそこではない。「何を言っても怒られない自由に発言できる場所」をキープすることが大事。

(井関副会長) 「延べ人数161人」とありますが、参加した人を名前でもリストにすると何人ぐらいでしたか？

(事務局：小川課長) 毎回参加の方もいて、重複している部分もあります。単発参加の方もいますが。

(出口委員) 1回だけご自身の告知で参加して、次は不参加の方も実際はいらっしゃると思います。逆に、告知も何もないけど毎回参加の方もいました。トータルで半分ぐらいですかね。

(浅見会長) 40をベースに数えるとあと10人ぐらいは乗っかる感じかな。

(事務局：小川課長) 中学生から現役世代、リタイア組まで、幅広い世代が参加していて、そこが面白いです。

(浅見委員) 面白いね。

(高橋委員) 面白い。

(井関副会長) 男女比とかはそれほど変わらない？

(出口委員) 男女比はそれほど変わらないです。

(井関副会長) 全体の政策的な話をします。私はこのような場はすごくいいと思います。ただ、これが全てではない。三層構造ぐらいと思っている。「テーマを決めて、関心がある人に来てもらう」ような「テーマを決めた場」も必要だと思うし、「テーマを決めない、誰でもOK、テーマもその場で決めよう」という「テーマなしの場」もあっていいと思う。

もう1つは、「補助金や事業をどのようにビジネス化していくか」のような「事業化をしていきたい人たちの学びの場」も必要だと思います。

この三層が芦屋市の中にあれば理想的です。

全体的なこのような場は誰が運営・設計すべきなのか。地域の中にどれだけあったらいいのか。テーマを決めた議論の場なら、どういうテーマで、年間どれだけやっていくべきなのか。せっかくなので、計画に入れてみてもいいのではないかな。まずは、場のデザイン。1つ1つの場というよりも「どのような場が、この芦屋市には必要なのか？」と考えていくことが大事です。

先ほど、構成について聞いたのは、「テーマを決めないで誰でも来てください」という設定だと、それはそういう人たちが来ると思う。それは悪いことではないが、逆に「そういう場だから行かない」という人もいると思います。良い悪いではない。ただ、多様な場を作っていくという視点が大事だと思います。

(出 口 委 員) この企画をするときは、必ず企画会議をしています。会議でも「テーマがあるほうがいいのか？ないほうがいいのか？」とうことは、必ず議論の対象になります。来年度は「ここはテーマを決めていきましょう」「ここはテーマなしでいきましょう」というように開催してもいいな。お話を聞いていて思いました。今までは「テーマなし」だったので、どなたかからテーマをいただいて「テーマあり」での実施も、来年度は設定していきたいです。参加しにくい方がいらっしやるのは事実です。

(井 関 副 会 長) 「どっちがいい」ではない。「両方必要」ですよ。

(出 口 委 員) 試験的にしてみます。

(井 関 副 会 長) 私は、京都市で「京都市未来まちづくり100人委員会」のアドバイザーもしました。「テーマを決めないで100人来てください」という会。100というのはシンボリックな数字だった。京都NPOセンターが受託し開催していました。テーマはそこで決めて、テーマごとにグループを作った。その後、各グループで実際に活動していくところまで頑張ってもらっていました。ただ、やはりメンバー内の温度差が、すごく課題になってきた。集め方によっては関心も違うし、どれだけ活動にコミットできるか、どれだけ時間を提供できるかということに差がある。

(高 橋 委 員) 事の発端は「街をどうするか」というようなことから始まったのですか？

(井 関 副 会 長) そうです。

(高 橋 委 員) 京都市はものすごく歴史もあるし、たくさんの人が関心を持っていると思う。参加は市民だけですか？

(井 関 副 会 長) 基本的に市民だけです。事業者の立場であれば、一市民として参加も可能という会でした。

(高 橋 委 員) 建設的なことは出たりしましたか？

(井 関 副 会 長) すごく一生懸命やられて、「市民のつどい場」と同じような開催で、各グループで申請すれば補助金ももらえるという流れでした。

(高 橋 委 員) 事例とかありますか？観光保存関係とかもあったのですか？

(井 関 副 会 長) 観光とは違うかたちで、地域のガイドブックを作ることや、和服を着るイベントの企画などがありました。他にもいろいろ出ていました。

「京都市未来まちづくり100人委員会」は7年程、継続して開催しました。次のステージでは、“事業化”です。集まって議論するだけでは、活動しても成果が出ない。京都市としては、成果のあるかたちにしていきたいと考えていたので、より洗練された「事業化までを考えている人たちの場」へシフトしていきました。

(高橋委員) 成果とか、何かありましたか？

(井関副会長) 私もそれ以降は関わっていないのですが、その後、100人会というかたちは、市全体ではなく各区でやり始めたらしいです。「誰でも来てもいい場」「どんなテーマでもいいので来てください」という場を区単位でやり始めた。ある意味、進化していったんじゃないかなと思う。

(浅見会長) 進化していくこと、進化させていくことはとてもいいと思います。このような場は変容、進化していくことで、これで一事業になる。これはずっとやっていけばいいと思う。事業がずっと流れていって、そこから「このテーマで集まりたい」という人たちが継続的に集まるとか、他の人たちに声をかけたりするとか。

「最終的に市民の皆さんにどうなってほしいのか」という目標を、漠然とでもいいから、先に掲げてみる。そこへ辿り着く方法は山ほどあるので、色々な方法を試してみたらいいと思う。広げておく、そのようなマインドが必要だと思います。

この「市民のつどい場」も、枠組みを先に決めるのではなく、在り方だけ決めておいて、この勢いでずっと続けた方がいい気がします。テーマが発生するのなら、テーマ達を脇に並べたらいい。恐らくこの方がよくなるのではないかな。「ここから何が生まれるか分からないな」と思いながらも、人は変わりながら、新たに参加する人もいながら、どうやったらいいのかと考えながら続けていくことがいいのではないのでしょうか。ただ、「出にくい」「出やすい」という問題は確かにあるから、そこは工夫がいるかもしれない。

(事務局：小川課長) 12月は、テーマ設定をして事前申込という流れでした。

終わった後も、みんなでワイワイ話していました。

つどい場から繋いだケースもあります。「今は子育て中だけど、すごく市民活動やりたい。子育てに関する何かをやりたいと思っている。」と言って参加された方がいました。「それだったらこの人紹介しようか」と繋がった事例もあります。本当に何がきっかけになるかは分からない。まずは“集まる”ということが大事だと思いました。

(浅見会長) 「何が起きるかわからない会合を続けておく」という状態をつくる。

(事務局：小川課長) 企画段階から参加したい人がいたら、手を挙げてもらい、Zoomで打合せをしたりしています。企画段階から誰でも参加できるようにしています。運営に関わると継続して参加してくれる気もしています。

(井関副会長) 京都市で「中学生の非行」というテーマの話し合いをしたことがあります。その時は「誰でも来てください」が成立しなかったです。やはりシビアなテーマだったので。このような場合は、対象者と「この場をつくっていく」ことをしないと成立しない。このような場合もあるということです。

そういう意味では、「テーマあり」「テーマなし」どちらも必要。なかなかフリーでは話せないネタでも、社会的に重要なテーマになるので。そのような場合には、やり方が必要だと感じます。

(浅見会長) テーマ別を単発にせず、そのテーマで1年間やっていくことも重要だと思う。

(宮平委員) 芦屋市全体で考えた時に「どこが」「誰が」すればいいかという話。ずっとリードあしやがやるべきテーマなのか。本来どこがやるべきなのか。やることの大変さというところ、本来は話し合うべきところがする。そうすれば、そこまでの負担感はないかもしれないと思います。

(浅見会長) 市民独自でそのような場を立ち上げるなら「ファシリテーター役の人を派遣します」という仕立てがあってもいいと思いました。最後は、参加者がお互いにファシリテーションできればいい。スタートだけ派遣が必要だと思う。

メンバーが変わると、だんだん変異もしていくしね。こういう場って、人が固定化すると敷居が高くなり始めて、タコツボ化していくことがよくある。そうならないようにしてほしい。場所・マインド・話題がオープンであり続けることに気を付けてほしいです。

(出口委員) 実は、来年度後半のファシリテーターは、いろいろな方にやってもらおうとしています。グラフィックレコーディングも講座を作って、講座参加者に、後半のグラフィックレコーディングをやってもらうような、実践の場を考えています。そこは「不正解はないから、間違っても何をしてもいいよ」という場です。「グラフィックレコーディング間違ってもいいよ」という場にして、そちらも育てていって、派生的にもっといろいろなところで活用できるのかなと思います。後半はそういった仕組みも考えています。

(浅見会長) 私が所属するところでも、来年度、ファシリテーションとグラフィックレコーディング講座を大々的にやろうと思っています。神戸学院の授業でもファシリテーショントレーニングを教えています。ファシリテーターを育てる授業。30人を相手に同じ授業を2回やるという仕立てです。

(井関副会長) 芦屋市で、企業が入るような場、取組はあるんですか？

(事務局：小川課長) 「こえる場」という、企業・市民・団体が一緒に集う場があり、何ができるか話し合う場があります。プラットフォームの場です。

(井関副会長) 高齢化が進む中で、市民活動の範囲を広げていくべきだと思う。企業でもSDGsなどに参画する動機づけができてきている。企業の中で「地域に関心があるけど仕事が…」という人にとって、地域に関わるビジネスができるとすごくいいですね。

そういう接点から新しいソーシャルビジネスを作っていくような、あるいは一般の企業としてのビジネス。そういうものを作っていく場があると非常にいいと思います。

神戸市では、アイデアソンが市職員の中に入りながらアプリ開発などを行っているようです。芦屋市もそのようにしていけるといいと思います。次の計画にはそういうことも入れていけたらいいですね。

オンラインの場もしっかりと作ってほしい。コロナ禍を経て、オンラインが実現化したという話もあったので。遠い場所にいる人も気軽に参加できるという意味で、オンラインの場も作っていくことが大事だと思います。

(事務局：小川課長) 企画会議には、中学生も参加します。学生は昼間学校なので、夜にオンラインで打合せに入ってもらったりもしています。

(浅見会長) 他は何かありますか？

-----<なし>-----

(浅見会長) 以上をもちまして、本日の会議を閉会いたします。ありがとうございました。

(事務局：小川課長) 本日はご意見をいただき、ありがとうございました。
引き続きどうぞご協力お願いいたします。

以 上